



2022 年度日本語教育学会支部集会予稿集

【中国支部】2023（令和5）年2月4日／オンライン開催

2022 年度第 4 回支部集会【中国支部】

2023 年 2 月 4 日(土)13:00-16:00(受付開始 12:45)

Zoomによるオンライン開催

主催:公益社団法人日本語教育学会

参加費:500 円 (要事前参加登録, マイページにてお支払いください。当日参加はできません。)

定員:40 名(先着順, 締切日前でも定員になり次第, 受付を終了します。)

※ご参加予定の方は, [学会ウェブサイトのマイページ](#) から 1 月 31 日(火)までに事前参加登録(支払含む)をお済ませください。

※事前参加登録をお済ませになるとマイページより予稿集をダウンロードできます。また, 事前参加登録者には, 開催 1 週間前よりメールにて当日の詳しい参加方法と, 口頭発表動画を別途ご案内いたします。

◆支部集会日程◆

12:45	受付開始
13:00-13:10	開会
13:10-14:10	講演 「ピア・ラーニングの理論と実践～教室での実践に向けて～」 講師:池田玲子氏(鳥取大学)
14:20-15:20	対話のひろば ※グループトークと講演者との質疑応答
15:30-15:50	口頭発表 「日本語学習者を対象としたアカデミック・ライティングでのピア・レビューー深い学びにつながるディープ・アクティブラーニングを目指す取り組み」 吉澤真由美(明海大学) ※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨はプログラム p.2, 詳細はマイページよりダウンロードできる予稿集原稿をご覧ください。オンライン開催では 1 週間前からご案内する発表動画と予稿集を各自で事前にご覧いただき, 当日のZoomでは発表者と質疑応答をいたします。なお, 口頭発表者への事前質問についても開催 1 週間前から前日 2 月 3 日(金)正午まで受け付けます。
15:50-16:00	閉会

◆問合せ先◆公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL:03-3262-4291 FAX:03-5216-7552 E-mail:shibu@nkg.or.jp



日本語学習者を対象としたアカデミック・ライティングでのピア・レビュー

—深い学びにつながるディープ・アクティブラーニングを目指す取り組み—

吉澤真由美（明海大学）

1. はじめに

筆者は、日本語学習者を対象とするアカデミック・ライティングの授業で、学習者間で書いた文章を読み合いコメントを交換し合うピア・レビューを長年行ってきた。ピア活動では、主体的な学びや多様な気づきが期待できるが、その一方で、表面的なコメント交換で終わったり、有益なコメントに受け手が気づかなかったりすることもあり限界も感じてきた。

近年、大学教育において講義中心の授業から脱却すべく、アクティブラーニングが広く取り入れられているが、深い学びにつながらないケースもあり課題となっている（松下編 2018, 溝上 2014）。そのような中、高次な認知機能を用いる活動を取入れ深い学びにつなげようとする「ディープ・アクティブラーニング」が松下編（2018）により提案されている。

筆者は日本語教育においても「ディープ・アクティブラーニング」による教育実践が有効だと考える。そこで、従来のピア・レビューに加え、ピア活動を振り返り、参考になると考えたコメントを専用シートにまとめ提出。教師も補足的にコメントを書き込み返却。どのコメントを取り入れるか学習者が判断しながら改稿といった高次な認知機能を用いると想定される活動を取り入れた。分析の結果、コメントを上手く活用し改稿している事例、参考になると判断したが改稿では取り入れなかった事例などがあつた。ピア・レビューにおいて、振り返り、判断などの活動は、深い思考や学びを伴う推敲、いわゆる「ディープ・アクティブラーニング」につながる可能性があると考えられる。

2. アクティブラーニングからディープ・アクティブラーニングへ

2.1 アクティブラーニング

2012年に中央教育審議会での答申で¹、大学教育において講義中心の授業から脱却し学生が能動的に学べる授業への転換を図る必要性が示され、能動的な学習の総称としてアクティブラーニングが取り上げられた。それをきっかけに、大学でのアクティブラーニングの普及に拍車がかかり（松本 2018, 溝上 2014）、現在広く取り入れられている。しかし、主体的な学びが期待できる一方で、問題点も指摘されている。

松下編（2018）、溝上（2014）を参考に主な問題を以下に挙げる。

- 1) 能動的活動を取り入れることが目的となり、学びを深めることができないケース
- 2) 能動的活動を重視するあまり知識の習得が軽視され、学びを深められないケース
- 3) 複数での活動では個々の責任が曖昧になりフリーライダー（ただ乗り）が出るケース

2.2 ディープ・アクティブラーニング

ディープ・アクティブラーニングは、アクティブラーニングに、深い学習 (deep learning) や学習への深いアプローチ (deep approach to learning) の概念を取り入れ、松下編(2018)が提唱したものである。松下編 (2018) によると、従来のアクティブラーニングは、能動的かどうかという「学習形態」を主に問題としている。それに対し、「学習の質」、つまり「学習の深さ」を問題とするのがディープ・アクティブラーニングである。

松下編 (2018) を参考に両者の関係を表 1 に示した。アクティブラーニングでは能動性が高い活動であっても、学びが深い (A) には至らず、学びが浅い学習 (C) で終わる可能性がある。それに対し、ディープ・アクティブラーニングでは、能動的で、かつ、深い学習 (A) の実現が目標とされる。その結果、先ほど挙げた 1), 2) の問題の解決につながる可能性もある。更に、学習を深めることで 3)を防ぐ効果も期待できる。

表 1 学習の種類

		学習の深さ	
		浅 ←	→ 深
能動性	低	D	B
	高	C	A

※松下編 (2018) を参考に作成

3. 本研究の目的

筆者は日本語教育においても、ディープ・アクティブラーニングの考え方を積極的に取り入れることで、より深い学び、表 1 (A) を実現することが可能であると考え。本研究では、上級学習者のピア・レビューで高次な認知機能を用いると考えられる活動を取り入れ、それが深い思考や学びを伴った推敲 (深い学習 A) につながるのか事例研究で明らかにすることを目的とする。

4. 本研究における高次な認知機能を用いる活動の捉え方

松下編 (2018,p46) では、深い学習につながる「高次の認知機能を用いる活動」の例として先行研究を参考に「振り返る」「仮説を立てる」「原理と関連づける」などを挙げている。

但し、これらは大学の教科や専門教育を念頭においたもので、そのまま言語教育に応用できない。そこで、本稿では、認知活動全般をモニタリング・コントロールする「メタ認知」の概念を援用する。「メタ認知」は分野や専門性などに関係なく、認知活動で重要な役割を果たすからである。三宮 (2018) はメタ認知に関する活動 (以下、メタ認知的活動) を、活動の事前・遂行時・事後の段階により以下のように捉えている。

- ・事前「課題の困難度を評価」「課題達成可能性を予想」
- ・遂行「課題の困難度を再評価」「課題遂行や方略の点検」「予想と実際のすれを感知」,
- ・事後「課題達成度を評価」「成功や失敗の原因判断」

このように、メタ認知的活動は、課題の段階ごとに重要な役割を果たしている。本稿では、言語学習においては、メタ認知的活動が「高次な認知機能を用いる活動」に深く関係すると想定し、認知活動を捉える枠組みとして用いる。

5. 研究概要

5.1 対象者とクラスの概要

2019 年春学期に都内私立大学の上級の日本語学習者を対象としたアカデミック・ライテ

ィングのクラスで調査を行った。学習者は23名（全員中国語母語話者）で、日本語能力はN2からN1程度であった。学期中、週に2コマ合わせて30回の授業を行った。週1コマを使いレポートの文体や段落や構成などライティングの基礎知識を学んだ。もう1コマで、自己紹介文、説明文、社会問題を取り上げたミニレポートを書くなどの実践的な授業を行った。

5.2 活動の概要と活動の位置づけ

実践的な授業では、以下の方法で学びを深めるための活動を行った。

- ① 数名で書いた文章を読み合い、コメントを交換するという通常のピア・レビューを実施。この時、もらったコメントは執筆者、もしくは、ピアが自由に原稿に書き込んだ。
- ② その後、ピア活動の振り返りを行い、もらったコメントの内、参考になると思ったコメントを専用のシートにまとめ、提出した。
- ③ 教師はシートと原稿を確認し、コメントに間違いや誤りがある場合や、コメントした方が良いと判断した場合に補足コメントを書き込んだ。
- ④ 学習者は、返却されたシートと原稿を参考に、それらのコメントを取り入れるのかどうか判断しながら、最終稿を完成させた。

この内、②ピア活動の振り返りでは、ピア・レビューの活動全体を評価したり、コメントが参考になるかどうか評価したりすることから、三宮(2018)のピア・レビューの事後活動の「課題達成度を評価」に相当すると判断した。④は、シートを参考に改稿がどの程度大変でどの程度のものが書けるのか考えるため、改稿前の「課題の困難度を再評価」「達成可能性を予測」に相当する。更に、改稿時には作業がうまくいっているか把握や判断するため、遂行時の「課題遂行や方略の点検」「予想と実際のずれを感知」に当たると判断した（表2参照）。

表2 本研究の活動とメタ認知的活動の関係

本研究の活動	メタ認知的活動（高次な認知機能を用いると想定される活動）
② ピアのコメントをシートにまとめる	【ピア・レビューの事後段階】 ピア活動の達成度の評価
④ ピアと教師コメントを参考に改稿	【改稿の事前段階】 改稿の困難度を評価、どの程度のものが書けるか予想 【改稿の遂行段階】 改稿時の方略の点検、課題達成の予想と実際のズレを感知

5.3 分析対象

授業では複数の文章を書いたが、賛成か反対か立場を明らかにし論述する意見文は、一定の構成パターンがあり、学生間で文章量にも大きな差がなかったため互いにコメントしやすかったと判断し分析の対象とした。初稿、コメントシート、最終稿を分析した。

6 分析結果

コメントを積極的に取り入れている、あまり取り入れていない、教師のコメントを中心に取り入れているなど様々なケースがあった。この内、コメントを積極的に取り入れながら、一部は取り入れていない2事例を詳しくみる。コメントごとに深い思考が行われた可能性が高いと考えられるからである。

6.1 事例1

「小学生を塾に行かせるべきかどうか」がテーマで、行かせないという反対の立場で書いた初稿である。ピア活動時に書き込んだコメントと訂正には二重下線を引いた。その後、教師が文法や語彙を中心に補足や訂正した部分には下線を引いた。

初稿小学生に塾は必要無いと思う。なぜなら、小学生は遊ぶ事が好きである。毎日塾に行き、遊び時間が少なくなると、多くの時間を勉強に使うと。また、小学生は子供なので、知識を身につける能力は低く、知識を十分理解できないはずだかもしれない。

たしかに塾に行くも良い点はある。塾で良い習慣が付き、将来に役に立つだろう。いい習慣を身につけ、将来中学生試験、高校生試験の時、他の受験生より、いい点数を取りやすいだろう。

しかし、小学生はまた小さいのに、毎日勉強していくと飽きるようになるだろう。それなら、将来は学校に行きたくなくなり、勉強もしたくなくなる。塾に勉強に行くより、遊び時の方が豊かな感性が育つ。

◎参考になると学習者が判断しシートにまとめた主なピアコメントが以下である。

- ・良い点：構成がいい
- ・改善点：句読点をもっと入れた方が良い

だろうを使いすぎているので他の言葉に変更する

◎教師がシートに補足したコメントが以下である。

- ・ピアコメントにもありましたが、だろうの代わりに、「～可能性がある」「～と考える」など工夫して使ってみましょう。

学習者がシートを参考に改稿した原稿が以下である。ピアからのコメントで訂正した部分は二重下線、教師からのコメントで訂正した部分は下線を引いた。

最終稿小学生に塾は必要無いと思う。なぜなら、小学生は遊ぶ事が好きである。毎日塾に行き、多くの時間を勉強に使うと。遊び時間が少なくなる。また、小学生は子供なので、知識を身につける能力は低く、知識を十分理解できないかもしれない。

確かに、塾にも良い点はある。塾で良い習慣が付き、将来に役に立つだろう。いい習慣を身につけ、将来中学生試験、高校生試験の時、他の受験生より、いい点数を取りやすいと思う。

しかし、小学生はまた小さいのに、毎日勉強していると飽きてしまう可能性もある。その結果、将来、学校に行きたくなくなり、勉強もしたくなくなる。塾に勉強に行くより、遊び時豊かな感性が育つ。

例えば、「高校生試験時他の受験生よりいい点数を取りやすい」の部分は、ピアからの読点をもっと入れるようにという助言に従い改稿し、読みやすくなっている。また、最終稿の最

後から3行目の「飽きてしまう可能性もある」は、「だろう」を多用しすぎているというピアからのコメント,そして、「飽きるようになる→飽きてしまう」という教師からの文法的な間違いの指摘の両方をうまく取り入れ書き直していた。

一方で、「塾に勉強に行くより、遊び時の方が豊かな感性が育つ。」とピアから「の方が」を入れた方がいいとコメントがあったが、それについては取り入れられていなかった。

6.2 事例2

次は、「中学時代の恋愛」をテーマに、賛成の立場で書いた文章の最終稿である。ピアから賛成する理由をもっと挙げるべきだという指摘を受け、②の部分を追加し、より内容が充実した。一方、①の部分については「一般的な状況で」を入れた方がいいとピアから助言を受けシートには書いていたが、最終稿では取り入れられていなかった。特殊は状況で判断ができないのは当然なので、一般的を入れた方がいいというピアからの助言であったと思われるが、「なかなかできない」と文末でまとめているので、「一般的」を入れなくても十分に正確に伝えられていると本人が判断した可能性が考えられる。

最終稿 中学時代の恋愛に賛成だ。なぜなら、中学時代に恋愛を通じて他人の気持ちをよくわかるようになる。また、恋愛は人間関係の一部である。人間関係を学ぶ上で恋愛は必要不可欠だと思う。付き合うことで、社交能力を養うことができる。

たしかに、中学時代の恋愛が悪い点もある。中学生の時、まだ子供なので、①正しい判断がなかなかできない。特に高校受験を控えている中学3年生は将来を考えて勉強に集中して欲しいという意見や。恋愛よりも勉強を優先すべきでは、という考えが多い。

しかし、二人は同じ目標を立て、それに向かって勉強することで両方ができると思う。②また、恋愛は人として成長に必要な過程である。付き合うことで今までと違う生活を送れることができる。楽しいことがあるし、悲しいこともある。でも、支えてくれる恋人がいるというだけで、毎日がとても充実しているのではないのでしょうか。

したがって、私は中学時代の恋愛に賛成である。本当は、素敵な恋愛ができればそれが一番楽しいことだ。

7 考察と今後の課題

本研究では、日本語教育においても「ディープ・アクティブラーニング」に基づく教育実践が有効だと考え、「ディープ・アクティブラーニング」(表1の学習A)につながる「高次な認知機能を用いる」と考えられる活動を取り入れ、深い思考や学びを伴った推敲が行われたのか事例研究で明らかにすることを目的とした。

初稿と改稿を分析した結果、ピアと教師からのコメントの両方をうまく取り入れ改稿しているケース、ピア・レビュー後の振り返りでは、参考になると判断したが、実際の改稿時に

は取り入れられていなかったケースがみられた。

これらの推敲は、ピア・レビュー後に活動を振り返り総合評価する、そして、改稿前に改稿の難しさを考えたり、どの程度のものが書けるのか予想したりする、改稿時にどのコメントを取り入れたら、自分の予想している課題のレベルが達成できるのか考えるといったメタ認知的活動がきっかけになり、行われたと考えられる。メタ認知的活動を取り入れることで、深い思考や判断が伴う推敲、いわゆる「ディープ・アクティブラーニング」につながる可能性が本事例により示すことができたと考えられる。

また、上級学習者を対象にしたピア・レビューの先行研究（影山，2001）では、ピア活動では内容や構成面への推敲がより多く行われ、教師フィードバックでは、形式面への推敲がより多く行われたと報告している。結果を受け、影山（2001）は、ピア・レビューと教師フィードバックの両方を組み合わせることでより高い効果が期待できると述べている。本研究でも、学習者コメントは内容と構成面を中心に行われていたことから、教師が形式面中心にコメントを補足した。学期末にアンケートを行い、ピアからのコメントをまとめる活動と、それに教師がコメントを加える方法について5件法（5点満点）で評価してもらった。その結果、ピアからのコメントをまとめる活動は平均4.2と評価は低くないが、自由記述欄に「真剣ではない人とピアになったら勉強にならない」と答えていた学生がいた。ピアに加え教師がコメントすることについては、平均4.7で自由記述も全て肯定的であった。ピア活動は相手によってもコメントの質や量が異なるため、教師が補足的に関わることで、活動がより充実し、深い学習につながる可能性も示せたと思われる。

しかし、本研究では数例の限られた事例だけしか扱うことができなかつたため、結果の解釈に限界がある。今後は、より多くの多様な事例を分析する必要がある。更に、ピア、教師からどのような種類のコメントが出され、どのように推敲に生かされたのか。そして、その時にどのような学びや気づきが生まれたのかなど、定量的な分析、学習者の意識を明らかにするためのインタビューも行い、深い学び、いわゆる「ディープ・アクティブラーニング」につながる活動についてより詳しく調べたいと考えている。

注

1. 2012年8月 中央審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて 一生涯学び続け、主体的に考える力を養成する大学へ」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

参考文献

- 影山陽子(2001)「上級学習者による推敲活動の実態 -ピア・レスポンスと教師フィードバック」『お茶の水女子大学人文科学紀要』54, 107-119.
- 三宮真智子 (2018)『メタ認知で<学ぶ力>を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法』北大路書房
- 溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著 (2018)『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房

公益社団法人日本語教育学会

支部活動委員会

委員長：橋本直幸

副委員長：國澤里美・嶋ちはる・永井涼子

委員：新城直樹・井上里鶴・内田さつき

御館久里恵・雁野恵・菊池哲佳

木下謙朗・島崎薫・世良時子

高橋志野・田川恭識・中河和子

中東靖恵・平田未季・深川美帆

松尾憲暁・元木佳江・山路奈保子

山本裕子・ルチラ パリハワダナ

審査・運営協力員

荒井智子・池田玲子・内山喜代成

福良直子・宮永愛子

公益社団法人日本語教育学会

2022年度第4回支部集会【中国支部】予稿集

発行 2022年12月26日

発行者 公益社団法人日本語教育学会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp

URL <https://www.nkg.or.jp>